

小中英語教育におけるスムーズな接続を目指した、小学生へのアルファベット読み書き指導

～ローマ字は日本語の表記方法であることの明示的指導とシンセティックフォニックスの導入～

千葉県松戸市立第五中学校 教諭(小中兼務) 岡本小枝

1 はじめに

松戸市の全小中学校は、平成23年度から文部科学省の教育課程特例校に指定されており、松戸市独自教科である「言語活用科」を小学校5・6年と中学校全学年で教えている。「言語活用科」は、子どもたちが論理的・批判的思考力やコミュニケーション能力を身につけ、将来、グローバル化する社会で活躍できる素地の育成を目指している。「英語分野」と「日本語分野」という2分野から構成され、「言語スキルを英語と日本語の両面から学び、相乗効果によって高めよう」ことをねらいとしている。

小学校の「英語分野」においては、「ハートでEnglish」という松戸市で制作した映像教材とワークブックを使用しており、5・6年生にアルファベットの読み書き指導も行っている。卒業時の目標として、大文字と小文字を書けるようになることと、ヘボン式ローマ字*で自分の名前や「千葉」「松戸」といった身近な地名を書けるようになることを掲げている。なお、松戸市では3年生の国語の授業において、訓令式ローマ字*は扱わずヘボン式ローマ字を指導している。

*ヘボン式ローマ字：アメリカ人のヘボンさんが作ったローマ字。

英語のつづりと発音の関係を考慮して作成された。

*訓令式ローマ字：昭和29年に内閣告示されたローマ字。

子音と母音の組合せに例外がない。

2 主題設定の理由

小学校で英語に親しみ、大文字と小文字やヘボン式ローマ字の練習を行った生徒が中学へ入学するようになり、中学1年の1学期の英語の授業は変化した。生徒は、英語を聞いたり話したりすることに以前よりも慣れているため、定着を目指した活動や、発展的な活動を展開することが可能となった。文字指導に関しては、アルファベットやヘボン式ローマ字の指導にかけていた時間を、他の活動へまわせるようになった。

しかしながら、依然として「英語の読み書き」に困難を抱える生徒はおり、英語学習に支障をきたしたまま、卒業していく現実がある。英単語のつづりをなか

なか覚えられず苦勞しながらも努力を続ける生徒や、努力してもだめだとあきらめてしまっている生徒などがある。中学校で行われているようなアルファベット指導が小学校で実施されるのではなく、従来とは異なる読み書き指導を研究し実践する必要性を感じていた。

私は平成29年度に、小中兼務教員として隣接する東部小学校にも配属され、5・6年(計7学級)に対して毎週1コマずつ英語を指導する機会を得た。小中学校の接続を英語教育の観点から考えたとき、松戸市では小学校5年生から読み書き指導を行っているため、中学校ではなく小学校で新たな読み書き指導のアプローチを研究し実践することが適切だと考えた。

3 研究のねらい

児童の目線に立ってアルファベットの読み書きを捉え、小中学校のスムーズな接続を目指して、小学校におけるよりよい読み書き指導を探る。その際、中学校英語科教員であれば指導できるという方法ではなく、小学校の教員が指導可能な現実的な方法を目指す。

4 研究の内容

アルファベット指導を振り返り、児童のとまどい解消を目指した結果、ローマ字とは何かという説明と、文字と音の関係を学ぶフォニックスの導入を検討した。

4.1. ローマ字

4.1.1. 「ローマ字とは何か」を指導する必要性

児童にとって最初に出会うアルファベットは、小学校3年次の国語の授業で学ぶローマ字である。日常生活で、アルファベットが使用されているのを目にしてはいるだろうが、まとまって学ぶのはこの時である。

そのため、その後の英語学習時に、どうしてもローマ字の影響を受けてしまう。中学校で授業中にプリントを配布すると「名前は英語で書くのですか？」という質問を時々受ける。ローマ字と英語の区別がついていないことを伺わせる発言である。「せっかくローマ字を覚えたのに、英語を読めない。」と嘆く生徒もいる。ローマ字は英語ではないことを伝えると、一様に驚き落胆する。ローマ字は日本語表記方法の1つであるこ

とを明示的に指導することにより、違いを明確にさせる必要があると考え15分間のプログラムを開発した。

4.1.2. 指導内容

3年次にヘボン式ローマ字を学習した5・6年生に対して、以下のようにローマ字とは何かを指導した。

(1) 写真を使った導入

- ・ヘボン式ローマ字を作ったヘボンさんの写真を見せてたずねる。「この男の人は誰かな？」



出典：Wikipedia

(2) ローマ字の復習

- ・ローマ字は母音を表すアルファベット(aiueo)と子音を表すアルファベットの組合せで表記する。(確認しながら、下記表をヘボン式ローマ字で埋めていく。)

子音 \ 母音	a	i	u	e	o
k					
s					
t					

- ・日本語は母音だけか子音+母音で1つの音になる。
- ・平仮名、片仮名は、1つの文字=1つの音。
- ・ローマ字は子音+母音で1つの音を表す。
日本語にはk, s, t等、子音だけの音はない。また、音がないため該当する仮名もない。(例外は「ん」)

(3) ローマ字とは

- ・3年生で学んだローマ字は英語かどうかたずねる。
- ・「ローマ字は英語と違う。」ことを明確に伝える。
- ・ローマ字は、英語と同じ文字を使って、日本語を表す方法。漢字や仮名を読み書きできない外国の人が、日本語の読み書きをするのを助けるもの。

(4) 仮名・漢字を読めない人のローマ字の発音

(板書) 原 はら ハラ (いずれも読めない)
(板書) Hara

- ・「アメリカ人は、母語である英語のように発音しようとしてこう読む。」と、英語の発音でHaraを読む。スペイン人であれば、スペイン語ではhを発音しないため、「アラ」と発音する、などを紹介する。
- ・自分が話す言葉のルールでローマ字を発音しようとするため、日本語の音のように発音してもらえない。(例えば、私の名前Saeは、大抵「セイ」か「サイ」と読まれる。)しかし、漢字や仮名を全く読めないよりは、文字として認識でき、発音も少し似た音で出来るので便利である。
- ・幕末にアメリカからヘボンさんがやってきた。自身の母語である、英語のつづりと発音の関係を取り入

れたヘボン式ローマ字を作った。

- ・「チ」は訓令式ローマ字ではtiだが、ヘボン式ローマ字ではchiであることを、表で確認する。TibaとChibaのどちらが「チバ」の発音に近いか、英語の発音でTibaとChibaを読んで確認する。chiの方が「チ」に近いので、ヘボンさんは「チ」はchiと表すことにしたことがわかる。(松戸の「ツ」も同様。)

4.2. フォニックス (文字と音の関係)

4.2.1. シンセティックフォニックス導入の理由

英単語のつづりを全て暗記するのはほぼ不可能である。英単語をスペルアウト (cat をシー・エイ・ティーと一文字ずつ読むこと) することで暗記しようと頑張る生徒や、ローマ字や見た目の形状から工夫して覚える (baseball を「バセバじゅういち」) など、各自で涙ぐましい努力をしている生徒がいる。これらの実情を鑑みて、文字と音の関係をフォニックスで学ぶことで、音からつづりを類推することができるようになり、読み書きの助けになると考えた。過去に実際に中学校でフォニックスの導入を試みたが、定着までの時数を確保することが難しく、フォニックスの歌や基本的なルールのみでの指導にとどめた経験がある。

このような現実を踏まえ、今回は、まず、良い教材はないか調査した。その結果、日本で広まっていたのは「アナリティックフォニックス」であること、アナリティックフォニックスの課題をクリアして発展してきた「シンセティックフォニックス」が、現在世界標準になりつつあるということがわかった。中でもイギリスの「ジョリーフォニックス」という教材の評価が良く、その学習効果の高さは、様々な研究によって明らかになっている。視覚・聴覚・運動感覚などの「多感覚アプローチ」が優れており、英語を母語としない子どもや特別支援が必要な子どもにも成果が出ている。

まだ日本ではシンセティックフォニックスは広まっていないが、平成29年4月に日本語版のジョリーフォニックスが出版された。公認トレーナーによるトレーニングも日本で行われており、私は、早速、トレーニングを受講した。その結果、従来のアナリティックフォニックスとは異なり、子どもにも指導者にも楽しく優しい指導法だということがよくわかった。さらに、指導方法が確立されているため導入しやすいこと、英語の発音以外は日本語での指導が推奨されていること、日本語版のワークブックと指導書、音声CDがあることから、小学校での普及が可能だと考えた。

既に松戸市では5・6年生でアルファベットの読み書きを学んでいることと、中学校に入ってからフォニックスを習得できるようになるまでの授業の時間を割くことは現実的ではないことから、私が担当する小学校の5・6年生で実施することにした。平成32年度からの新学習指導要領では、アルファベットは小学校で教えることになる。そのため、授業時数が増える小学校でフォニックスを教えれば、中学校で読み書きに困る生徒が減り、小中学校のスムーズな接続を実現できるのではないか、と考えた。

4.2.2 指導内容

各アルファベットの文字、例えばAには、「エイ」という「名前」と「ア」という「音」がある。ジョリーフォニックスでは、文字の「名前」ではなく、発音頻度の高い「音」を先に教える。その際、英文のほとんどを占める小文字の指導を、ABC 順ではなく読める単語が増えやすい順 (s→a→t→i→p→n～順) に学ぶ。そのため、習った知識を使ってすぐに単語の読み書き練習ができ、「読める」「書ける」単語が増えていく喜びを実感しながら学習を進めることができる。文字の名前と音だけでなく、大文字と小文字を同時に学ぶアナリティックフォニックスよりも児童の負担は少なく、合理的である。

下記流れを45分授業の中の15分間で実施し、毎回1音を導入した。

(1) 前時まで学んだ音の復習

フラッシュカードを使った復習を通じて定着を図る。

(2) 導入する文字と音に関連したお話と絵

例えば、m の場合は、3人の登場人物がお腹をすかせて夕ご飯を待っている絵を見せながら、短いお話を聞かせる。お話の中で、m の「音」を出しながら、片手でお腹をなせるアクションを教員がする。



(3) 発音・アクション

お話の中でどのような音とアクションをしていたかを確認し、児童も一緒に発音とアクションを行う。

(4) 文字

音に対応する文字の形と書き順を確認する。

(5) 聞き取り

教員が読む単語の中に、新しく学んだ音が含まれていたかを聞き取る。(例: 教員が発音する mug の中に、m の音が入っているかどうかを聞き取る。)

(6) ブレンディング

単語を読む時に、1音ずつ一通り読んだ後、それらの音をつなげて読む(ブレンドする)。(例: ham を1音ずつ h, a, m と分けて読んだ後、次第に3つの音をつなげて読み、数回目には ham と一息に読む。)

(7) ディクテーション

聞こえた単語を紙に書く。(例: 教員が発音する dip を聞き、頭の中で1音ずつ d・i・p にばらした後、それぞれに対応する文字を思い出して紙に書く。)



(8) お話と絵・文字の音に関連した歌を聞く(15秒)

学んだお話と絵に沿った歌詞に、文字の音が入る歌を聞く。文字の音の部分で該当のアクションをする。

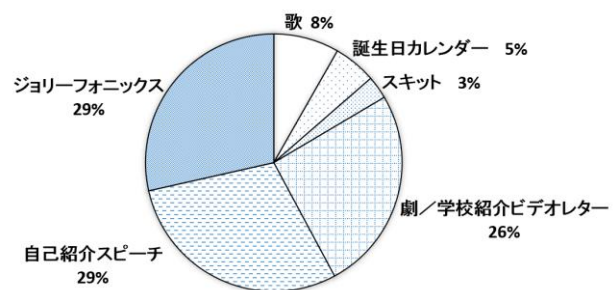
5 成果と課題

5.1 成果

ローマ字は英語と違うことと、シンセティックフォニックスの指導による成果は以下のとおりである。

5.1.1 児童と学級担任によるアンケート結果

5・6年生全員に対するアンケートで、一番自分のためになったと思う活動を1つだけ選ばせたところ、「自己紹介スピーチ」と並んで「ジョリーフォニックス」を選んだ割合が多かった。



「文字と音を楽しく身につけることができたか」をたずね、「楽しかった=4」から「楽しくなかった=1」と「身についた=4」から「身につかなかった=1」のそれぞれについて回答してもらったところ、どちらの平均値も4点満点中3.7であった。児童は、楽しく文字と音の関係を身につけていることがわかる。

【児童の感想（抜粋、児童の記述のまま）】

- ・今まで英語はローマ字だとずっと思っていた。ちがいがあることがわかった。
- ・文字を動作や絵、物語で覚えられたので、とても覚えやすかったし、わかりやすかった。
- ・アルファベットの1つ1つに音があって、それが組み合わさって単語の発音ができていることを知った。
- ・身近にある英語を前よりいっぱい読めるようになってすごくうれしい。英語の自信がついた。

【担任の感想（抜粋、要旨）】

- ・発音と口の形の説明はとてもわかりやすい。
- ・子どもたちが、似ている音の違いをきちんと説明できるようにになっている。
- ・英語が読めない子も読めるようになる事に驚いた。
- ・「読める、聞いて書ける」というのは子どもにとって自信となり、英語が好きになると思う。
- ・とても楽しく、自分も子どもたちと共に学べた。

5.1.2. 実践をとおして

実践をとおして感じた成果と考察を下記に述べる。

- ・1音ずつ多感覚アプローチで学ぶことによって、長期記憶に残りやすい。
- ・多くの中学生が書けないであろうディクテーションを、上位層だけでなくほとんどの児童ができていた光景は驚愕である。
- ・つづりを1つずつ読もうとする姿勢が身につく。読み書きが苦手な生徒は、「なんとなく」読む傾向がある。例えばpから始まり途中にlがある単語はpopularと判断する。そのためpeopleをポピュラーと発音する。文字と音の関係を1音ずつ指導していけば、このような生徒は減ると予想される。
- ・担任の先生もジョリーフォニックスを通じて学んでくださった。このような姿勢で担任の先生が取り組んでいくことが、小学校で英語教育が進んでいく上での鍵ではないかと思う。
- ・「前に出て話すのは苦手だったけど、発音の練習をしてきたおかげで、すこし慣れた。自信がついた。」という児童の感想があった。ジョリーフォニックスでの学習が下支えとなり、スピーチや劇など他の表現活動へ良い影響を与えていることがわかる。
- ・フォニックスのルールは、中学校の教科書の約7割の単語をカバーしている。「たった7割」とも捉えられるが、ほとんど読み書きができない生徒が「7割も」できるようになるのはかなりの助けといえる。

- ・ジョリーフォニックスを低学年から少しずつ学んで中学校にあがれば、読み書きで困る生徒は減ると考える。英語の音にも慣れるため、リスニングやスピーキング時にも良い影響をもたらすことが予想される。ジョリーフォニックスの導入によって、英語の4技能の基礎を養わせることができるといえる。
- ・松戸市教育委員会に効果を認めて頂き、平成32年度から、市内全小学校低学年でのジョリーフォニックスの導入が決まった。より良い指導を、多くの児童に対して行えることになり、感謝している。

5.2. 課題

- ・低学年からフォニックスを学ぶことによって、3年生から学ぶローマ字をフォニックスのルールで読み書きしてしまうことが想定される。例えばローマ字の学習中に、愛:aiを「エイ」と発音したら、まずはフォニックスの定着をほめたうえで、この場合のaiはローマ字なのでどのように発音すればよいか、と指導していくが必要になる。
- ・中学校の英語科教員が、小学校で学ぶ内容を理解しスムーズな接続を目指すことが課題である。例えば「nの発音はmと違って口が開いて、舌先が上の前歯の付け根についてこういう音だね。」と言いながらアクションをすることにより、小学校での指導が生かされ、既習事項の定着につなげることができる。

6 おわりに

ローマ字は何か、を理解することや、1音ずつ文字の音を学ぶことは時間がかかり、一見遠回りのように思えるかもしれない。しかし読み書きに困難を抱えたまま過ごすであろうその後の膨大な時間を考えると、本実践のように読み書き指導の初期に時間を割り当てることは、習得への近道といえるだろう。

多感覚でのアプローチにより、フォニックスを楽しみながら身につけ、児童が、「読める」「書ける」「発音できる」と実感できることは、自信がつくだけでなく、英語を学ぶ意欲の向上につながると考える。

短時間で効果的に学習できるシンセティックフォニックスの日本語版教材が出版され、確立された指導方法を日本語で行える状況になった。15分間のプログラムは、授業内でもモジュールでの実施も可能である。多くの学校が直面しているであろう読み書き指導の課題に対して、本実践はどの地域・学校でも実施可能な指導内容と方法だといえる。読み書きで困る児童生徒が減ることを願い今後も検討・改善を続けていきたい。